



# 「わが町 麻生」

からむしの表紙が、五十九号から「麻生の自然と風物」をテーマとしていることを思い、いろいろ迷った末に基本に立ち戻つてみることにした。

区が三十数年前に分かれるとき、当時の関係者が区名を麻生にした見識が、三〇〇年もの歴史を刻んだ名称であることを、今一度思い起してみたいと思ったからである。

ご存知のように、万葉集は七世紀後半から八世紀後半にかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集である。さまざまな人間が詠んだ歌を四五〇〇首以上も集めたもので、成立は七五九年以降とみられる。

私たちが住む地名の麻生は、万葉の時代から歌にも詠まれ、栽培がされなくなった今でも草むらなどに苧麻が自生している。

万葉集が書かれた時代、武蔵野の南部を流れる多摩川べりでは、朝廷に税として納める手織りの麻布づくりが盛んであった。

奈良時代に朝廷では、武蔵国へ二〇〇〇人余の渡来人が送りこまれ、麻の栽培から、麻織物、染色など進んだ技術が、上質の上布として大切にされた。

多摩川にさらす手作りさらさら

なにそこの児のこごだかなしき

麻苧(あさを)らを麻笥(おけ)に多(ふすま)に積まずとも

明日来せざめや いざせ小床(を)とこに

(万葉集より)

絵と文 山本絢子

からむし六十四号の  
ラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介

今号は山本絢子さんの「わが町麻生」。区名の由来となったからむしの絵とからむしの古事来歴が紹介されています。

P2 新区長からのメッセージ

四月に着任された多田貴栄新区長から「地域の繋がりをへの思い」がよせられました。

P3 「文化かわさき」の紹介

川崎市総合文化団体連絡会の季刊誌「文化かわさき」の創刊号から最新号に至る編集方針を菅野明編集長が解説します。

P4 文化サロンの森妙子さんが

タイでの異文化交流について寄稿して頂きました。

P5 団体会員の「夏菟太鼓」を主宰

する修廣寺の菅原陽子さんが太鼓への想いを語ります。

P6 三月三日に開催された雑学教室

「奥の細道」の紹介と、四月二十日の文化協会総会の記録です。

P7 第三四回かわさき市民芸術祭

舞台部門(洋舞)と、アルテリッカ新ゆり美術展の報告です。

P8 会員の活動のページ

画集「佐藤勝昭スケッチ紀行」、吉田功さんの川崎市長賞受賞、麻生童謡をうたう会のブラジル合唱祭参加報告を紹介しました。

# 麻生区の地域の繋がりへの思い

川崎市麻生区長 多田貴榮



このたび四月一日付で麻生区長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

就任直前には「麻生川の桜まつり」に参加させていただき、好天かつ満開の桜のもと一足先に麻生区の美しい自然と風景を満喫させていただきました。

麻生区役所への赴任も区長職も初めてでございます。区長としての重責を感じる一方、これからの職務には新たな体験や発見が数多くあるのではと期待しております。

川崎市は昨年二五〇万人を超え人口を擁することとなり、麻生区においても緩やかな人口の増加傾向が継続しており、高齢化率を見ますと他の区と比べて高く今後にも上昇していく見込みとなっております。

また、少子化、核家族化や多様な価値観、パソコンスマートフォンなど、暮らしを取り巻く環境も様変わりしており、人々のつながりの希薄化などが地域の課題となっている

と存じます。

そうした暮らしを取り巻く環境の変化はありますが、麻生区には多数の文化関係の地域資源が存在している強みと魅力があり、芸術・文化に関する施設といたしましては昭和音楽大学、日本映画

大学、川崎市アートセンターなどが集積し、それに伴い新百合ヶ丘駅周辺には数多くの質の高いホールが立地しており、本年四月には、黒川駅前新たに「読売日本交響楽団練習所」が落成し、文化・芸術のまちづくりを推進する魅力と環境が一層充実したところでございます。

また、里山や都市農業などの豊かな自然も多く存在し、それらを活かした様々な取組みも行われており、地域活力の向上と文化の継承につながっているのではと感じております。

麻生区文化協会は、長年にわたる会報「からむし」の発行を継続しており、数部拝見した限りではございますが、様々な文化・芸術活動の

高みに達した方々の執筆により、地域の文化活動や地域資源を分かりやすく丁寧で紹介されており、この「からむし」そのものが麻生区の地域文化の貴重な記録資料のひとつになっていると存じます。

また、古くからの伝統文化の継承に尽力されつつ、音楽、舞踏、美術など、様々な活動を地域の皆さまとの協働により文化の振興に取り組み、中でも「あさお古風七草粥」は、お正月の風物詩として定着し、毎年大勢の区民の皆さまが訪れ大盛況と聞いております。地域への愛着を深め伝統を継承しながら地域のつながりづくりに大きく寄与している素晴らしい活動とのことでございますので、今からとても期待しております。

東京オリンピック・パラリンピック開催はいよいよ再来年となり、国をあげて本番に向け様々な準備が進んでおり、東京に近い川崎市や近隣自治体にも海外から訪れる方が大幅に増えることと思われ、その方々は日本や各地域の文化や暮らし等

にも関心を寄せられることと想定しております。

その様なこともあり、市民一人一人が自分の住む地域・文化等に関心や愛着を持ち、理解を深めることは大切なことと存じます。

麻生区文化協会は、地域文化の担い手として中核的な存在であり、地域に根ざした文化・芸術活動は、地域の方々と様々な市民活動団体、大学等とのつながりづくりや、区民の皆さまの文化に関する理解・意識の醸成に資するものと期待しております。

川崎市では、「川崎らしい都市型の地域包括ケアシステムの構築をめざして」取組みを推進しており、麻生区におきましても、「心が響きあう福祉のまちあさお」（区民・地域団体・区の各々ができることが音楽を奏できるように調和し、まちに響きあうことの願いが込められています）を理念に①「区民が主役の地域づくり」②「区民本位の福祉サービスの提供」③「ひと・もの場をつなぐ自助・互助の仕組みづくり」を基本に取り組んでまいります。

また、区民の皆さまが、まちに愛着と誇りを持ち、地域資源を大切に育むとともに、地域や大学など様々な主体が手を取り合い、支え合うことで、未来に広がる誰もが暮

らしやすいまちづくりを進めてまいりたいと存じますので、皆さまのご理解ご協力をお願いいたします。

結びに麻生区文化協会のますますの発展と皆様のご健勝、末永いご活躍を心からお祈り申し上げます。



麻生古風七草粥の会風景



麻生川の桜まつり風景

# 「文化かわさき」を紹介します

文化かわさき編集長 菅野明

「文化かわさき」は昭和五十年に季刊第一号が発行されています。川崎市にある五つの総合文化団体が物の面でも心の面でも協力しあつて、川崎市総合文化団体連絡会という窓口を作り、ここから全市民的な文化活動を展開しようとしていました。その二つの現れとして、「文化かわさき」が創刊されました。

当時、川崎市総合文化団体連絡会(総文連)加盟団体は川崎市文化協会、川崎文化会議、中原区文化協会、高津区文化協会、多摩区文化協会の五団体でした。その後新しい区

が誕生するなどして、現在は川崎市文化協会、幸区文化協会、宮前区文化協会、麻生区文化協会、児童文化団体連絡会が加わつて十団体となっています。各文化団体から二名ずつ出て「文化かわさき」の編集委員会を構成しています。

「文化かわさき」を発起し、そして初代の編集長をされた藤田親昌氏は創刊号で、「文化かわさき」の編集方針は、古くからある川崎の文化活動をほりおこし、新しい文化を創

造していこうとしています。流れをかえるという言葉が流行しています

が、文化の流れを変えるために、私たちは何をやらなければならないか、多面体である文化を生活という立場からどうつかまえていくべきか、ここにかんがえ、実践しなければならぬ事が沢山あります」と書いています。そして巻頭言では「この小さな雑誌は、市民のための「文化の広場」として創刊されました。いろいろな意味で雑誌づくりに皆さんが参加されることを心から望んでいます」と言っています。

藤田親昌氏は当時、多摩区文化協会の会長をしておりましたが、麻生区の誕生とともに麻生区文化協会の発足に尽力され、初代の会長となつた方です。「文化かわさき」には創刊号以来十八号まで編集長として先導してこられました。その後、箕輪敏行氏、杉本長治氏、小笠原功氏とい

た方々が編集長としてその意思を継ぎ育ててきました。十号の編集後記には、「九号が総文連の会報的性格を強く強く打ち出した編集になつたが、地方の文化雑誌としての「文化か

わさき」に流れを変えて欲しいという、大勢の読者の声に応えて編集方針を変えました」と書いています。そして、引き継ぐに当つては、この方針と創刊号の巻頭言の言葉を今の編集委員にも伝えていきます。

これまで発行されたどの号でも特集を組んでいます。川崎に因んだ道の文化、水の文化、そして、人生風景など特集してきました。また、その年が周年或いは創立など記念するような事柄は時宜を得た特集としてきました。思い出がある、想いがある、研究や調査をしてきた、また、関わってきた今携わつている、そういった方々に寄稿していただいたり、取材したりして特集を作つてきています。

平成十九年、麻生区にアートセンターがオープンしました。「文化かわさき」二十九号では特集「新百合芸術のまちづくりをめざして」を発行しています。この号には、麻生区の芸術・文化について造詣の深い方々の座談会が載っています。また、芸術・文化に活躍している多くの方々を紙面に登場させています。

三十八号では(南武線におもいを寄せて)を特集しました。南武線は市民の皆さんに愛着があつた、時に、九十周年を記念しての市民劇「南武線誕生物語」の上演も相俟つてか多くの方に関心を寄せて頂きました。

「文化かわさき」では、時の市長に文化振興・芸術振興についてインタビューのかたちで話を聞いてきています。伊藤市長から今の福田市長まで、「工場のまち川崎」から文化創造のまちを標榜してきた過程がよみとれます。「文化かわさき」は、三十九号の発行に至っています。創刊号から開いてみますと実に多様な方々が執筆しています。これからこの号でも市井の文芸家を載せていきたいと思っています。

「文化かわさき」発行の経過

号	特集テーマ	号	特集テーマ
1	川崎の文化を考える(座談会)	21	新時代の市民文化を目指して・総文連25周年を迎えて
2	水の文化<総合研究>	22	図書館を考える
3	水の文化II<水の流れを市民の手に>	23	川崎と音楽
4	道の文化(I)	24	川崎の寄席へ地域を育て、育てられ
5	道の文化(II)<東海道川崎宿>	25	音楽のある町・川崎
6	道の文化 特集II川崎の蘭方医家・大田家の事	26	市民と文化施設
7	山の文化特集<丘陵と人>	27	都市と観光
8	かわさきに生きる	28	いま、「川崎市市民ミュージアムを考える」
9	市民芸術家	29	新百合 芸術のまちづくりをめざして
10	続 道の文化	30	映像とかわさき
11	石の文化 特集 川崎の生き物	31	川崎と二ヶ領用水
12	川崎の花・はな 佐藤惣之助100年	32	川崎と佐藤惣之助
13	続 川崎の花・はな 特集 川崎の生き物	33	東日本大震災と川崎
14	川崎の地名 地名博物館に期待する	34	川崎のスポーツ文化
15	川崎の祭り	35	街あるき
16	川崎の四季 「川崎の文化財」展によせて	36	市制90年・戦後70年 私と川崎
17	戦後半世紀人生風景 田中休惠「民間省要」をめぐる	37	この半世紀・川崎の変化と私
18	川崎の文化を考える・地域に生きる寺々	38	南武線におもいを寄せて
19	川崎の商家 藤田親昌氏を偲んで	39	150万人都市かわさき
20	子どもたちの今は・未来は〜川崎の教育を考える		



文化かわさき 創刊号



文化かわさき 38号

# タイでの異文化交流

サロン部部长 森妙子

日本が好景気に沸いていた一九八〇年代、南米から日系人が逆移民として来日。日本のことも日本語も知らないままに両親と共にやってきた子供たちが学校に入学し苦勞していた。その様子を見て、よし、教員を退職したら私が南米に行つて、日本へ行く子供たちの為に役立つ」と決心した。

退職してまず日本語教師の勉強開始。母語話者としての国語の指導法と外国人の為の日本語指導法は文法からして異なるからだ。

初めての海外活動はタイにおけるタマサート大学での実習から始まった。その中で、かつて日本に留学し、日本通のソムチャイ先生と教育についてよく論じ合い、肝胆相照らす仲になった。そして、タマサート大学内の東アジア研究所の所長になった先生より、推薦した人は何を協力してくれるかと問われ、タイ行きを決断。東アジア研究所長顧問の名刺をいただき驚いた。

最初に取り組んだ仕事は、織田有楽斎の茶室を模した建物の障子を張

り替えること。書院造の戸袋には蜂が巣作りしていたので、それだけは取り除いてもらって作業開始。子供時代、年末に父の助手で障子を張り替えていたことが役立った。日本語も英語も解せないタイ人女性と、タイ語が全く理解できない私との二人の作業であったが、完成するころは心が通じて笑顔で作業。障子紙が残っていたのと、ココナツの粉で作った糊が役立つて荒れ果てた部屋が俄かに明るくなり、まずは大喜び。

タイではしばしば突然行事があったり、なくなったり。普段着の綿パンツで作業を終えた頃、突然お迎えがあつて、行つたところは年に一度の（先生に感謝する式典）。学生主体の盛大で厳粛な式典の後には楽しい催し。最後は学生がお世話になる先生にバラの花を次々に贈呈。私にもたくさんバラの花が贈られ驚いた！

この年は王様が在位六十周年と、八十歳の誕生日が重なり様々なイベントがあり、所長顧問はいつもよい席に座つて楽しませて貰つた。チャオプラヤ川を何十艘もの飾り立てた船で昔

の装束の貴人や船乗りたちが船団を組んで進んでいく様は絵巻物を見ていようだった。

卒業式では、いくつもの検査を通して、教授の纏う特別な衣装を着せていただき、舞台では証書授与のプリンスに七メートル余りの席。緊張した時間を過ごした。T大学や東アジア研究所で行事がある時は必ず招待していただいた。

しかし、仕事への返事は「はい」「イエス」でお願いします」との言葉で、日本文化紹介では何でも実行。ティセレモニーでは、高校生に茶道体験をと言われ、出されたのはカテキン茶。これでは全くダメと、ようやく探し当てた裏千家の方が、「私の手持ちで良かったらどうぞ」と抹茶を下さつた。干菓子もないのでバンコクの伊勢丹まで行き、ドラ焼きを買つた。当日、茶室の私の隣にいつの間にかタイ人の男子学生が座つて「埼玉大に二年留学したので通訳します」とのこと。安堵した。ジャイアンみたいな大きな高校生が神妙に座つて「コム（苦い）」と言つたので、ドラ焼きはドラえもん

の大好きなお菓子和説明したらニッコリ。ティセレモニーを片付ける間もなく、広場での盆踊りに呼ばれた。これには学長さんまでもが見学参加。「レッツダンス」と呼びかけるが、皆、浴衣姿の私の写真ばかりとつて、ちつ

とも踊らず困り果てた。暑い中、冷や汗もかいた。

ワラヤ大学（教員養成大学）では日本語教師として二クラスを担当した。学生は演劇的手法で会話を学ぶのが大好きで、よく笑い合ひながら学んでいた。行つて早々にイングリッシュキャンプがあつた。日本のことも何か教えて欲しいとのことで、踊ること大好きな学生に盆踊りを伝授した。

王様の叔母様にあたるプリンセス、ワラヤが創立した大学では、命日にセレモニーを執り行い、大学祭が始まる。セレモニーには急遽取り寄せた着物を着て献花。今年は日本からも参加してくれたと喜ばれ、いろいろな方と一緒に写真におさまった。大

学祭では詳細がなかなか決まらず、「今年は貴女の計画がいいので、メイソンを日本文化紹介にしたい」ということになり東奔西走。バンコク在住のお花の先生に突撃依頼し、生け花講座の開催や、展示もしていただいた。東アジア研究所を通し、日タイ友好の歴史パネルを借用展示。折り紙教室と浴衣の着付けと写真撮影も実施。富士山と桜の特大パネルの前での写真はまるで日本を旅した写真のようで大人気であつた。この、直前に日本へ帰国。書道の先生から何本もの掛け軸をお借りし、メインの舞台を飾り雰囲気盛り上げることが

できた。また、日本の子どもたちの書と、私の日本語クラスの学生たちが二時間程で初めて書き上げた書も並べて展示し、これは大学の先生たちが「うちの学生たちの書も素晴らしい」と大喜びだった。

タイの皆さんにはとても感謝され、いつも熱いもてなしを受けたが、どの活動も自分一人では到底できず、タイの大学関係者、在タイ日本人の方々、また日本で応援してくれた大勢の皆さんの協力があつてできたことと感謝、感謝。

一年という短期間ではあつたが、タイの文化を大いに学ばせていただいたが、日本のこともいろいろ発信するチャンスもいただき、楽しく充実したタイでの生活であつた。

続けて行つたポルピアでの活動報告は機会があつたらまたいつか。



タマサート大学 東アジア研究所にて

# なっかりだいこ 夏菟太鼓とわたしのリズム

夏菟太鼓代表 菅原陽子

## ◇なぜ太鼓に関わるのか

私は東京都世田谷区経堂に生まれ育ち、縁あって二年は狛江市に住み昭和五十年四月二日に柿生という、私にとつては全くの新天地に住むことになりました。また首のすわらない長男を育てながらあまり人を見かけないこの地で生きて行くことと決めたのです。

あるとき、お祭りや盆踊りにでかけてみると、子どもたちの参加者が少ないと感じました。「ここで生きて行く」と決めたので、自分に何かできることはないかと考えてみました。私は幸い、小さい時からモダンダンスやリトミックなどのリズムに親しんできました。さらに駒沢大学の児童教育部に所属して、子どもたちを楽しませる活動にたずさわる経験を、重ねることができました。この経験をこれから住まう柿生という地域に役立てようと思ったのです。

多少のお手伝いが機縁となり、片平、五力田、万福寺等町内会からお声がかかって盆踊りの際の子どもたちの太鼓の指導につながりました。  
昭和五十年、幼稚園教諭の退職金



を使って、私設、「スノーピー図書館」も始めました。

地元のお祭りや盆踊りに参加して楽しい経験を積んだ子どもたちは「なつかしいふるさと体験」をもつに至り、仮に地元を離れてもこの地を大切に思い、いつかこの地に再びもどってくるでしょう。

## ◇夏菟太鼓の発足と特長

今までの活動が元になり、市民活動として和太鼓チーム「夏菟太鼓」が発足したのは昭和五十三年なので、すでに四十年が経過したことになります。

夏菟太鼓の現在は、転居の為に退会

する大人や受験の為に休会する子どもはいますが、十五年位するとひよつこり顔を出してまた仲間に加わってくる。これがうれしくてたまらない私です。

この夏菟太鼓という和太鼓チームの特長は、単に盆踊りの伴奏をするチームではなく、既にあるよく知られた曲の演奏のみを行うチームでもなく、すなわち、地域の歴史や、伝承や風土を活かした新しい曲を創作し、多くの人に伝えるために演奏をすることを中心としたチームなのです。また、洗練された太鼓の曲というよりも、「祈り」や「願い」や「喜び」や「生活のいとなみ」そのものの表現、いわば土くささを重視した演奏を心がけメンバーの子どもたち、働きの人がら集まっている大人たちのコミュニティでありつづけた。

## ◇なぜ、太鼓にこだわるのか

私が太鼓をお薦めするのは、長年の指導体験で、次のようなことを見聞きしたからです。太鼓の演奏をしていると、話しことばがリズムミカルになるといふことです。また、お料理上手になるといわれます。さらに音楽的な表現力、観賞力も高まるといわれます。また、呼吸がリズムミカルになり、健康にも良いそうです。さらに掃除など、仕事の手順もよくなるといわれます。それらの根拠を検証するには至つ

ていませんが、教えながら、リズムを楽しみつつ、諸々の面に手応えと変様が表われるのは興味深いことです。



歴史から作曲した。

「夏菟太鼓」これは昔から、地域の人々が大切にされた仏像が片平の修廣寺に安置されて十二年に一度、寅年の秋に御開帳されます。

「寅舞い」これは、寅薬師にちなんだ祭りをと作曲しました。写真よりご想像ください。

「うさぎもちつき」赤ちゃん、幼児がすぐに参加できる曲として作曲しました。だつこしていたり、親のそばに立っているだけで絵になります。

今は詳しく言えませんが、新しい曲の創作に挑戦しています。地域にはまだまだ太鼓作の素材がたくさんあります。地域の祭りやイベントに参加出来る作品に仕上がるよう努力しつづけ、スタッフになれることを、心待ちにしています。



## ◇これからの夏菟太鼓

夏菟太鼓の歩みは、ゆつくりかもしれません。しかし目標を変えずにコツコツと活動を積み重ねているお陰で、異なる年代層が、同じ曲にかわり、年代間の交流が生まれるのも魅力です。

今まで創作し演奏してきた曲には次のようなものがあります。  
「巻狩り太鼓」これは昔、源頼朝が柿生の地で巻狩をくり広げたという



雑学教室(三月二日)

「奥の細道」

芭蕉と曾良の発句(俳句)を辿って

講師 安藤正憲先生

今回の講師の安藤先生は学者肌の方で、はたして全くのアウトドア派の方で、日本百名山完全登頂の他、二度に及ぶ四国遍路、東海道、中山道等の街道歩きも楽しまれた方です。今回の雑学教室「奥の細道」はそんな安藤先生が五年をかけて芭蕉の足跡を辿った奥の細道の様子を、映像やそこで詠まれた芭蕉の俳句を挿入してお話しされたもので、その内容と共に気取らぬ話され方も好感を呼びました。

寺(山寺)に入る。根本中堂、奥の院など見学。山が深い。



立石寺 奥の院

閑けさや巖にしみ入る蟬の声 最上川下り。古口乗船所から舟に乗り草薙まで十二キロメートルを下る。芭蕉一行とはほぼ同じコースだ。

五月雨を集めて早し最上川

ここからは私が安藤先生および芭蕉翁になつたつもりでお話します。二〇〇九年六月十日 深川の芭蕉記念館を振り出しに、奥の細道へのチャレンジ開始。五年計画だが身体が持つかや心配。ちなみに芭蕉が曾良と出発したのは二六八九年三月二十七日でした。

山入口の出羽三山神社随神門から神域に入る。国宝の羽黒山五重塔を過ぎ、二千余段の石段を登り切ると出羽三山神社である。涼しさやほの三月月の羽黒山 吹浦から象潟を往復する。象潟。芭蕉の時代には海だった所で、かつては九十九島といわれた美しい島の跡が田圃の中に浮かんでいる。

草の戸も住替る代ぞ雛の家 一週間ほどで日光に到着、東照宮に参拝後裏見の滝へ向う。しばらくは瀧にこもるや夏の初め 出発後二十八日目、平泉市の中尊寺に到着。義経像、金色堂、弁慶の墓などを見学する。

象潟や雨に西施が合歡の花 酒田より日本海に沿ってひたすら下る。新潟、出雲崎、柏崎、親不知等を通り市振に到着。



象潟 弁天島

五月雨の降り残してや光堂 次いで将棋の街天童市を通り立石



安藤正憲先生

一つ家に遊女も寝たり秋と月 句で有名な所です。旅の終点大垣へ。八月下旬 芭蕉は旅の終点地、大垣にたどり着いた。六百里に及ぶ長旅であった。多くの弟子、友人が旅の成功を祈ってくれたが、芭蕉は「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」の句を残し、次の目的地の二見ヶ浦に旅立って行ったのである。(山室 茂樹)

麻生区文化協会平成三十年度総会

平成三十年四月二十日市民館大会議室

【会長挨拶】 菅原敬子会長は「三十年の際、あたらしい風と創造」を掲げて四年、各事業が目標に向けて「歩踏み出している。文化協会のどのイベントも素晴らしい、麻生区はすごいでしょう」といつも自慢しているが、今年さらには「歩踏み出した。麻生区には七十九国三三〇名の海外の方がおられるので、この方々に日本の伝統文化に触れてもらう機会を増やしたい。また、麻生区は日本で最も長寿の地域と発表されたが、自然環境だけでなく文化環境にも恵まれていることが長寿につながっている。今後

年配者だけでなく若い人も巻き込んだ活動を進めたい。三十年度も一丸となって文化活動を進めるので力を貸して欲しい」と呼びかけました。

【表彰】麻生区文化奨励賞 麻生区文化協会舞台芸能部に所属し、文化祭、親子教室などを通じて本会の文化活動に尽力された井上恵美子さんと、アカデミー部に所属し、俳句大会の企画運営に携わり、また会計担当役員として本会の活性化に大いに貢献されている横川博行さんが麻生区文化祭奨励賞を受賞、新任の麻生区長 多田貴栄さんから賞状を授与されました。

【表彰】麻生区文化振興賞 麻生区文化協会の初代会長から現会長まで五代にわたって役員、専門委員として、本会の発展に尽力してこられた加宮節子さんに、菅原会長から賞状と副賞が授与されました。

【来賓挨拶】 多田貴栄新区長は、「近年、人と人の繋がりが希薄になっている。こんなとき、芸術活動はますます大切だと感じている。文化協会の地域文化向上に向けての活動に期待している」と述べました。

三枝正孝市民館長は「麻生区文化協会は市民館を利用してレベルの高い活動をしていただいております。感謝している。市民館としても、ホール改装、壁紙張り替え、椅子交換など、環境整備に努めているので、文化協会の活動をさらに進めて欲しい」と述べました。



【平成二九年年度事業報告】 総会議案書に掲載された事業報告にそって、平成二九年度に麻生区文化協会が行ったすべての事

業について総務および各部署から報告され、拍手で承認されました。

【平成二九年年度決算報告】 総会議案書に示された一般会計および特別会計の決算について会計から報告されました。決算報告につき、監事から適正であるとの監査結果が報告され、会計報告は拍手で承認されました。

【平成三〇年度事業計画案】 総会議案書に掲載された事業計画(案)にそって、平成三〇年度に麻生区文化協会が行う事業案について総務から報告されました。

質疑の中で、菅原登さんから、ふるさと麻生を伝えていく中で新しい風を吹かせるような講演などを行ってはどうかという提案があり、これに対し、菅原会長から「提案を活動の中に活かしたい」との回答がありました。事業計画は拍手で承認されました。

【平成三〇年度予算案】 総会議案書に示された総額二八万九八三五円の一般会計予算案が提案され、拍手で承認されました。

【役員選挙委員会報告】 麻生区文化協会規約第九条に基づき平成三〇二二年度の役員選挙が行われ、以下の候補者が選挙されたことを委員長から提案され拍手で承認されました。

【新役員】 会長 菅原敬子 / 副会長 伊藤胡桃 山室茂樹 横須賀朝子 / 会計 小田島寛 横川博行 / 総務 佐藤勝昭 橋本周 / 監事 花輪佳子 吉田功 (佐藤勝昭)

第三十四回

かわさき市民芸術祭 舞台部門を終えて

実行委員長 伊藤胡桃

三月四日(日)第三十四回かわさき市民芸術祭が幸市民館にて行われまし  
た。「和」と「洋」の舞台部門が交互にあ  
り、今年は洋楽・洋舞の開催で主催は総  
文連(川崎市総合文化団体連絡会)、共  
催は川崎市によるものです。参加は川  
崎市文化協会をはじめ川崎市七区の文  
化協会からの八団体となりました。伊  
藤副市長のお祝いの言葉、総文連福島  
理事長のあいさつに始まり、川崎市文化  
財団多田理事長もご臨席されました。

麻生区文化協会・かわさき市民芸術  
祭の舞台を経験した関 優奈(新国立バ  
レエ団)、武石光嗣(元東京バレエ団)を  
メインに構成や振付、またダンサーたち  
の技量を褒めて頂ける結果となり、こ  
の機会を頂いたことを大変感謝し、麻  
生区文化協会と洋舞ぐるーぷのご理解  
とご協力にお礼申し上げます。

ホールの規模により川崎市全区で開  
催するのが難しいのですが、幸市民館へ  
の来場者は予想以上の数となりました。  
この芸術祭にあたって今回大きく変  
わった点は、予算が足りない関係で今ま  
でずっと行われてきた下見(スタッフに  
事前に作品を見てもらい照明などの打  
ち合わせをする)を省いたことです。前  
日のリハーサルで初めて全体がわかると  
いう不安を抱えながら、なんとか実行  
委員出演団体の皆さんのご協力で大過  
ない開催となりました。

芸術祭の今後を考えると、川崎市  
の文化協会が一つの目標に向かって創り  
上げる機会はとても貴重なものです。  
実行委員会に任せられた形の中で、各区  
の芸術祭への考え方や温度の違いに頭  
を抱えることがあります。さらに質  
の向上を求めているものになったら  
と願います。

麻生区文化協会の作品は創作で  
Chopin Suite(クラシックバレエ)AWhat  
is ahead(コンテンポラリーダンス)の二作  
品。持ち時間の少ないことや日程が合  
わないことなどあり、胡桃バレエスタジ  
オ単独での出演とさせていただきますし  
なりませ

最近よく耳にする「楽しんで何々が  
できました」「楽しみたいと思います」  
など、重い表現ではないその裏に、言葉  
だけでは言い尽くせないだけの努力  
と時間が費やされていることかと  
想像します。舞台においても表現者の  
探求心や情熱や価値観までもすぐ観  
る側に伝わりませ。感動してもらえ  
るには何が重要なのか、まだまだ未熟  
でも目指すところは高く、創り上げて  
ゆく心を大切にという思いを改めて  
感じた芸術祭でした。来年は「和」に  
なりませ

第十回を迎えたアルテリツカ新ゆり美術展

三月五日より十一日まで新百合21ホ  
ールにて、新ゆり美術展が開催された。  
毎年恒例の行事だが、今年は、記念すべ  
き第十回の展覧会として開催された。

初日の五日にはオープニングパーティ  
ーが開かれた。雨模様の中にもかかわらず  
多数の関係者が参加し、十年目を  
迎えた展覧会の苦労話など数々のエビ  
ソードが紹介され、和やかな雰囲気  
の祝宴となった。

さて、会場内は例年のように二つのブ  
ースに分かれている。ひとつは区内に在  
住する二十名の作家で組織した美術家  
協会による作品の展示である。ゆつたり  
した空間にレイアウトされた日本画、油  
彩、水彩、彫刻、染色などによる大作は、  
内外の団体に所属する作家も多く、個  
性豊かで高い技術と相まって観る人に感  
動を与えてくれるものである。十日に行  
われたギャラリートークにおいて、作者の  
思いや苦労話に参加者にも公開で披露  
されており、作品を理解する良い機会  
となっている。



もうひとつ  
は、区文化協  
会に所属し、  
日々制作に打  
ち込んできた  
会員による絵  
画、書、陶芸、  
写真、工芸、生

け花などの作品と、文化協会主催のデ  
ッサン会に参加した区民が劇団民藝の  
モデルさんを描いた作品の展示である。  
これらは、作品の数も多く幅広いスベ  
ースも狭く見えるほどの充実ぶりだ  
ある。中でも部屋中央に飾られた生  
け花は、訪れる人の目を惹く大作であ  
る。実は、これらの作品は、区内に在住  
するいくつもの華道の流派の先生方が、  
所属する流  
派の垣根を  
取り払い、共  
同で制作し  
た作品なので  
ある。このよ  
うな形で作  
品を公開す  
るのは大変珍  
しく、文化の  
麻生区なら  
ではの特長と言えよう。当日までに何  
度も打ち合わせを重ね、材料を準備し  
て、期間中も熱心に交代で手入れする  
姿が見られた。



さらには、壁面には作者の思いがあふれた  
絵画や工芸作品が展示され二点二点はど  
のように作られたのか、その制作過程や  
技法の高さなど趣味の領域を越えた目  
をひく作品も多く楽しめるものだった。  
また、内外にも名の知れた六人の書  
家による大きな作品は圧巻である。何

より表現された分かりやすい言葉と文  
字によるモノトーンの世界はそれぞれ  
が個性的で、作品の前で佇み観るもの  
を惹きつける魅力にあふれている。  
陶芸作品は、三人の作家が三points  
つ出品し、そ  
れぞれの器の  
形や大皿の色  
彩などには、い  
つもながら作  
者の確かな技  
術と経験に裏  
打ちされた見  
応えのある完  
成度の高さが  
光っていた。

白い壁に整然と並ぶ十二点の写真は、  
一人二点ずつの出品で撮影の意図や傾  
向がよく伝わり、例年にも増して洗練  
されている。レンズを通して見つけた旅  
先の風景や人物の美しい色彩やタイト  
ルから、その一瞬の情景に託す作者の思  
いが伝わってくる。  
中央の壁面に展示された十六点の作  
品は、民藝のモデルさんを描いており、単  
なるデッサンではなく時間をかけて仕  
上げた魅力的なものが多くなっている。  
今年、桐光学園中高生のみならず  
による作品が寄せられ、受付前の明る  
い場所に展示された。アクリル画等の  
元気な表現には若さがあふれていた。  
なお、入場者数は、雨天に阻まれた日  
が続いたにもかかわらず、二五二五人を  
記録する記念大会となった。(小田鳥寛)



さらには、壁面には作者の思いがあふれた  
絵画や工芸作品が展示され二点二点はど  
のように作られたのか、その制作過程や  
技法の高さなど趣味の領域を越えた目  
をひく作品も多く楽しめるものだった。  
また、内外にも名の知れた六人の書  
家による大きな作品は圧巻である。何

### 会員の活躍

#### 佐藤勝昭さんが画集を刊行

文化協会の総務として活躍されている佐藤勝昭さんが美術年鑑社から「佐藤勝昭スケッチ紀行 vol.1 ヨーロッパ」を刊行されました。

アルテリッカ美術展や文化祭の市民ギャラリー等でご紹介された方は佐藤さんがスケッチブックに様々な日常の断片を切り取って爽やかな水彩で描いていらつしやるのをご存知でしょう。今回の画集には佐藤さんが国際会議で訪れた際に描いたフランス・ド・イツス・スペインの六十枚以上の作品が掲載され、その枚ずつに解説が書かれています。絵を見て解説を読んでいるような気持ちになります。

旅行経験のある方なら一目見て懐かしく思い出されることでしょう。

写真とは違って、この本の水彩画には風やにおいや街の喧騒まで伝わってくるようです。(小田島紀美)



#### 吉田功さん

##### 川崎市長賞受賞

第十回高津全国俳句大会が十二月二十二日高津市民館において開催された。俳句は元来垣根のない文芸で、どこかの俳句大会でも分け隔てなく参加できる。今回の高津の俳句大会には特別ゲストとしてNHK俳句でもおなじみの宇多喜代子さんの「これからの俳句はどう変わるのか」というトークも企画され盛会であった。

トークの後、俳句大会の入選作の披露、表彰が行われ、二四〇〇句余りの事前投句の部において吉田功さん(文化協会 アカデミー部)の句が見事に川崎市長賞の栄冠に輝いた。

#### 秋の空 抗痙剤で眠くなる

吉田功

(評) 抗がん剤の眠気、朦朧としてくると、居ながらにして世界旅行をしているような気持ちになります。

旅行経験のある方なら一目見て懐かしく思い出されることでしょう。

写真とは違って、この本の水彩画には風やにおいや街の喧騒まで伝わってくるようです。(小田島紀美)

また、当日投句の優秀句の発表もあり、

ポインセチア

花舗の少女の眼のつづら

横川博行

の句が石寒大選の佳作となり、思わぬ傑作であった。いま俳句をユネスコの無形文化遺産に登録する運動も進められている。結社、地域、国を超えた俳句の交流も目指したい。(横川博行)

平成三十年度  
麻生区俳句大会のご案内  
日時 十一月四日(日) 場所 麻生市民館

#### 麻生童謡をうたう会 日本ブラジル交流合唱祭参加

日本から約二万km、地球の裏のブラジルは現在でも約三〇時間飛行。明治四十二年(一九〇八年)移住が始まった当時は五十数日の船旅で到着。そのブラジルの「サンパウロ新聞社」と「ブラジル日本文化福祉協会(文協)」の招聘に応え十五名で十一月七日〜十六日の日程で訪問しました。

今年が「ブラジル日本移民百年」を迎える年であり、そのイベントの開催に招聘を受けたのです。

現在は五世・六世の成長と共に世界最大の日系社会がブラジルに築かれ、サンパウロにしっかりと根づいていました。移住者は「日本にいるときもブラジルに来てからも大変な苦労を経験した」と語っています。日本人の勤勉、正直、誠実を高くかわれており、私たちの会の名前入りTシャツを見て町で一緒に写真を撮るとカメラを向けられたり「あの人たちは日本人だヨ！」の声を大きな拍手が市場で沸き起こったり、手を振られたりしました。

現在サンパウロには二五万人が移住し、二九〇万人の日系人が活躍しています。立派な東洋人街があり大きな赤い鳥居と提燈がざらりと街並みを飾っています。日系の方々の立派な会館もあり多くの方々が活動し私たちが温かく迎えてくださいました。

◆日本ブラジル交流合唱祭(十一月十一日)  
補助席も入れ会場満席の人たちが総立ちで大きな拍手で迎えて下さいました。

日本のなつかしい「おぼろ月夜」「赤とんぼ」などの合唱をきいて頂きました。ブラジルの方々の歌声もすばらしく心に残りました。最後に「故郷」を会場の人たちも一緒に歌いました。涙をふく人、めがねをはずして目頭をおさえる人、私たちが胸がいっぱいになり「来て良かった」と誰もの心に沸上がりました。

このように日本の歌が感動を多くの人に与えることができ、「童謡は心のふるさと」なのだと思わされたブラジル訪問でした。また、移民はその時々と深い関わりをもっており、それだけに日系社会の歴史は日本の歴史でもあると強く思いました。(菅原敬子)

### 文化協会のこれから

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会  
七月十五日(日) 大会議室

夏休み親子教室  
七月二十五日(水)〜八月十八日(土)

麻生市民館他

麻生区文化祭

十月二十日(日) 麻生フィル・ホール

文化サロン・大会議室

十月十九日(金)〜二十四日(水)

美術工芸展/俳句展示・ギャラリー!

オープンスペース

十月三日(土)

邦舞/邦楽・ホール

吟舞/吟詠・大会議室

十月四日(日)

洋舞・ホール 俳句大会・大会議室

十一月十三日(土)〜二十四日(水)

子ども俳句展示・麻生区役所 階ロビー

### 編集後記

「からむし六十四号」を発行するにあたり様々なことが脳裏をよぎりました。国の内外のことでは言いようのないやりきれなさをおぼえたり、また、いろいろな分野で多くの若者達が活躍する姿に感動したりした一年でもありました。

そして、私たち文化協会に目を向けたとき、高齢化が進んでいる一方で、着々と新しい風が吹いていることも感じられます。お正月恒例行事である「古風七草粥の会」では、今年には新たに麻生区PTA連絡協議会の方々や田園調布学園大学の学生さんたちがボランティアとして活躍してくださりました。平成三十年度もいろいろな行事により多くの方々の参加を期待したいと思っております。(岩田輝夫)

#### 編集委員

岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報

からむし 第六十四号

平成三十年五月一日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会 広報部

川崎市麻生区万福寺一五二

麻生文化センター内

電話 〇四四一九五一〜三〇〇

印刷 (株) エリアブレイン